

のこ 遺っているからこそ美しい！

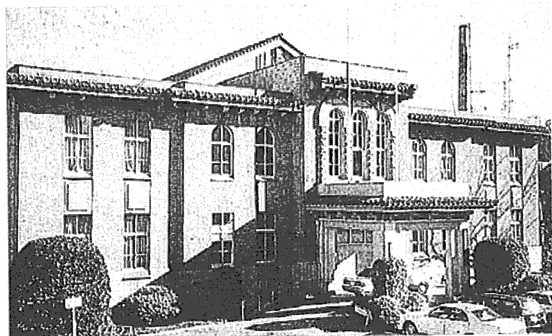
「ライフスタイル（暮らしぶり）

の歴史的背景と都市・建築美」

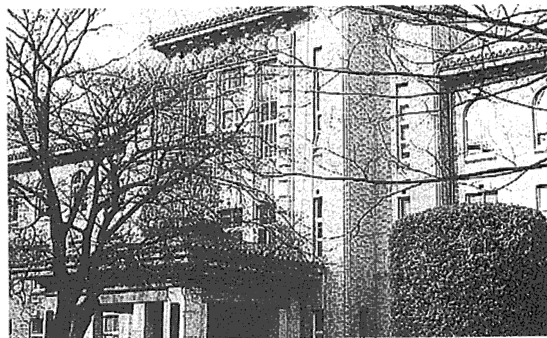


久保田 要
(山梨メセナ協会会員)

春先のこと、某紙面の文化欄に「私は近代モダニズム建築を通して“山都（さんと）昭和物語”「県議会議事堂→旧本館→第一南別館→甲府市庁舎南別館→法人会館」を回遊型散策ルートとして構築し、歴史的文化遺産をいかした街づくりによる都市再生プランを提案したい。」という記事を執筆したことがあった。



県会議事堂 S5年



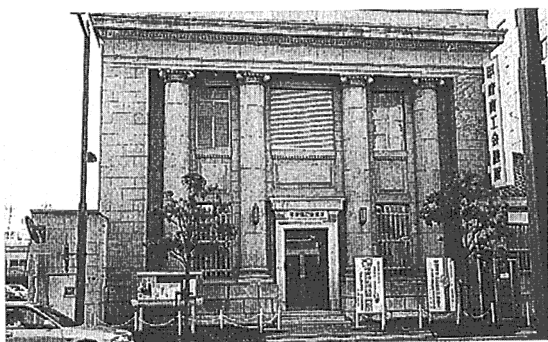
県庁舎（旧本館） S5年



甲府市庁舎南別館所 S4年



県庁南第二別館 S5年

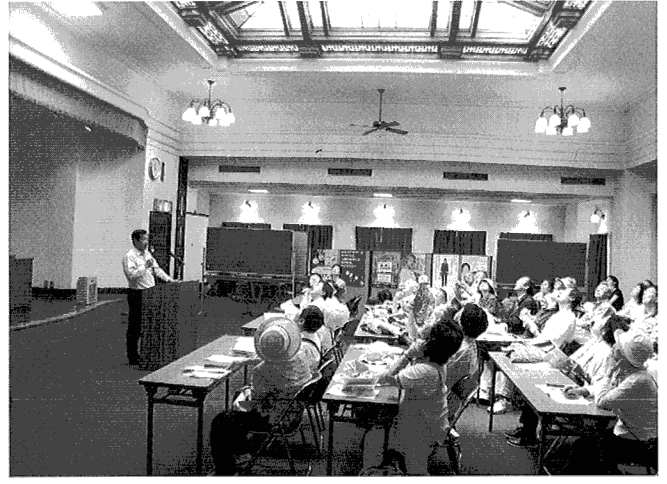


無き旧甲府商工会議所 S4年



甲府法人会館 T15 (S1) 年

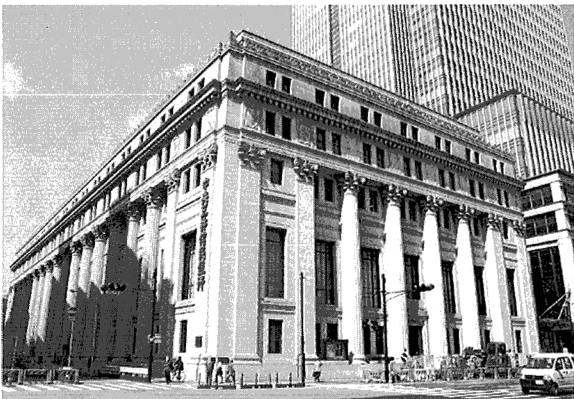
その後、意識ある市民やつなぐNPOより、そのツアーを企画したいと依頼され、9月5日実現した。約50名以上の老若男女が参加された。そのなかでも圧巻は、山梨文化会館（都市のインフラとしての建築）では、いま類似コンセプトのイタリアポローニャ・フィエラセンターでは30年経ていまいややく立ち上がって建築途中のこのエピソードや、旧県庁本館の帝冠様式（最上階に天皇陛下のお写真を祀る「正庁＝奉安殿」のある）・議事堂等とコルビジエを代表するモダニズム建築家たちも傾倒したオランダのディ・スティール派（幾何学的美学）や分離派（表現派・建築造形運動）の影響を受けた作風である旧県立図書館（県庁第一南別館）が激動の昭和4・5年竣工の時期を同じくして対峙して建築されていることの重要性和、戦前（活況を呈していた大正・昭和初期デモクラシー）、戦後の歴史を留める正反対のライフスタイルの現象が表現されていることを通して、甲府の文化の厚みなどを参加者と時空のなかで共感できたことであった。なかでも「甲府の町も一流の文化が遺っていて安心した」といわれた方々のお言葉が今でも心に響いている。



芸術・文化は一夜にしては出来ない、東武の創始者・根津嘉一郎が全県の小学校にピアノを寄贈して芸術・文化の情操教育に貢献したのが昭和8年であった。それを遡ること3年前、運営拠点として社団法人山梨教育会に旧県立図書館（昭和5年）となった建物を寄贈し、すぐ県に委ねられたのであった。その礎の上で現代の我々の芸術・文化基盤が存在していることも事実として疑うものはないであろう。いま同じく各社の寄付行為の上で芸術・文化の社会貢献しているNPO法人メセナ協会は、根津嘉一郎を始めとした私財を投じての芸術文化に貢献したことをどう検証したらよいのだろうか。その世界に発信できる歴史的建造物がいま潰されそうになっている。新しい県庁を造るのに邪魔だ、耐震補強や移転に費用がかかるという短絡的な理由付けなど荒々しい県庁内の言動には不安を感じる。そもそもアーバンデザイン（都市再生）は人々の生きた履歴（文化）を^{この}遺しながら開発することである。私たちの芸術・文化の社会貢献がいとやすく、時の為政者によって葬り去られたならば、私たちのNPO法人メセナ協会の存在意味は何であったのか、後世は評価できまい。



あらためて歴史的建造物の価値を見直し、今生きている私たちの町のアイデンティティーや誇りを取り戻したまちを創り続ける基盤をつくる時が来ている。横浜市都市整備局都市デザイン室（「歴史を活かした街づくり要綱」を昭和63年（平成元年）より実施施行している）などの行政価値を高めている政策から見ると、周回遅れの感は否めずとも気付いたときから始めるしかない。進取に富む気質のある人々も目新しさだけの町の味気なさにはもううんざりしている。甲府のまちの再生は、都市の遺伝子をつなぎながらの他に見当たらない。



三井本館を遺して高層再開発した。企業価値を高めた例



曳き屋して旧横浜銀行本店別館（元第一銀行横浜支店）遺して高層再開発し政策価値を高めた例